一宮市博物館だより

No.53 2014.3

もくじ

博物館アルバム（平成25年度下半期）…… 2
美術探訪　一宮のケシと画家たち …… 4
文化財保護事業　一宮市埋蔵文化財包蔵地分布調査 … 5
文化財保護事業　妙興寺釈迦三尊 …… 6
平成26年度催し物のご案内 …… 8

市指定文化財　木造釈迦三尊坐像（妙興寺蔵・公益財団法人美術院写真提供）

特別展

縄文から弥生へ～馬見塚遺跡の時代

▼10月12日(土)～11月17日(日)

馬見塚遺跡が大正十五年に発見されてから約九十年の間にどのような調査が行われてきたか、そして現在どのような研究が行われているかを紹介しました。会期中には、発掘調査に携わった二人の講師が調査結果からわかった、稲作の展開についての講演を行いました。また、最終の二日間では、考古学フォーラムと共催のシンポジウムを開催しました。会期中、全国からたくさんの方々が来館され、何度も博物館へ足を運んでいた方も多くいました。

■11月3日講演会 設楽博己 氏

■共催事業 考古学シンポジウム

■10月20日講演会 能登健 氏

会期中のイベント

■講演会 10月20日(日)
「馬見塚遺跡から広がった話―濃尾地震と島畑―」
講師／能登健氏(群馬大学講師)

■講演会 11月3日(日)
「馬見塚遺跡H地点の発掘調査
―農耕のはじまりを求めて―」
講師／設楽博己氏(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

■共催事業 11月16日(土)・17日(日)
考古学シンポジウム
「尾張低地の縄文時代―馬見塚遺跡とその周辺―」

■体験講座
10月26日(土)「縄文のアクセサリー・勾玉をつくろう！」
11月9日(土)「アンギン編みでコースターをつくろう！」

■学芸員による展示解説
10月19日(土)、11月10日(日)

玉堂記念木曽川図書館

川合玉堂生誕百四十周年記念特別展 ふるさとの風景

▼10月11日(金)～11月13日(水)

玉堂作品十五点に加え、玉堂の師である橋本雅邦の《林間残照図》(駿府博物館蔵)を展示し、玉堂の代名詞ともいえる風景画に焦点を当て、その特色を紹介しました。

会期中のイベント

■11月13日(水)
記念講演会
「川合玉堂の風景画の展開」
講師／吉田俊英氏
(豊田市美術館館長)

■学芸員による展示解説
(全9回)

■10月23日展示解説

企画展

2013一宮市現代作家美術秀選展

▼11月30日(土)～12月15日(日)

今回が十三回目となるこの展覧会は、第七十一回一宮市美術展の成果等をうけて、一宮市美術展依頼出品者・市長賞受賞、一宮美術作家協会・一宮書道協会・一宮写真協会推薦者の作品を展示しました。

展示された多くの作品と共に、出品者たちの一年の成果の見える展覧会となりました。

■平成25年度の展示風景

企画展

暮らしの中の民具～観察する～

▼1月11日(土)～3月9日(日)

平成三年度より始まった、歴史を学び始める子どもたちのための「くらしの道具～今と昔」。平成二十三年度から「くらしの道具」全般を展示するとともに、「暮らしの中の民具」と題し、二つのテーマを選び、紹介しています。今年度のテーマは「観察する」。機械化する以前の道具をじっくりと観察することで、先人たちの「ちえ」を紹介しました。

会期中のイベント

■1月12日(日)
おりとあみのひみつ

■1月19日(日)
うすのいろいろ

■1月26日(日)
大根切干のつくりかた

■大根切干のつくりかた

■おりとあみのひみつ

民俗芸能公演

▼3月9日(日)

一宮市域には、江戸時代より続く伝統芸能や祭りが伝承されています。博物館では、民俗芸能の普及のため、毎年公演を行っています。今回は、市指定無形文化財「島文楽」「ばしょう踊」「宮後住吉踊」を紹介しました。

博物館講座

尾張平野を語る18 仁王胴具足の謎に迫る

これまで、本講座では歴史のみならず自然環境や民俗文化など様々な分野から講師を招いて講演会を開催し、尾張平野について考えてきました。

十八回目となる今回は、一宮市木曽川町に伝わる「仁王胴具足」の共同研究と復元に向けての調査の成果を紹介しました。

■仁王胴具足

■2月2日講演　北野信彦 氏、犬塚将英 氏

内容

■2月2日(日)
「仁王胴具足の構造調査から見えてくるもの
～桃山文化期の技術革新～」
講師／北野信彦氏(東京文化財研究所保存修復科学センター
伝統技術研究室室長)
講師／犬塚将英氏(東京文化財研究所保存修復科学センター
主任研究員)

■2月9日(日)
「文化財染織品の科学分析から分かること
～仁王胴具足を含む種々の染織品を例にして～」
講師／佐々木良子氏(京都工芸繊維大学美術工芸資料館研究員)

■2月16日(日)
「甲冑史からみた仁王胴具足」
講師／池田宏氏(東京国立博物館学芸研究部付日本工芸研究担当上席研究員)

■2月23日(日)
「戦国時代の変わり兜と仁王胴具足の製作背景」
講師／小池富雄氏(鶴見大学文学部文化財学科教授)

■3月2日(日)
「桃山時代の仁王胴具足を復元する」
講師／寺本靖氏(寺本文化財工芸社甲冑師)

市民文化財めぐり

▼11月12日(火)

市民の皆さんに、郷土の貴重な財産である文化財を紹介して、先人を偲び、文化財愛護の精神を高めるために、昭和四十二年度以来毎年度「市民文化財めぐり」を開催してきました。

今回は、禅林寺～常保寺～浮野古戦場址～日吉社～馬見塚遺跡～博物館というコースを巡り、一宮市東部を中心に指定文化財を巡りました。

■禅林寺での解説の様子

■浮野古戦場址での解説の様子

文化財保護週間

文化財防火パトロール 文化財防火訓練

▼1月16日(木)
▼1月23日(木)

昭和二十四年一月二十六日に奈良・法隆寺の金堂壁画が焼失しました。以来、この日を「文化財防火デー」と定め、防災意識の高揚のため各種行事を開催しています。

市教育委員会は消防本部とともに、一月十六日に文化財管理者宅での防火、消防設備点検をする文化財防火パトロール、同二十三日には防火訓練・文化財管理者研修を実施しました。

■文化財防火訓練（賀茂神社）

古文書講座

▼5月～2月

平成二十六年二月八日、全十回の講座を終了しました。本年度は、一宮村浅井家文書をテキストとして使用しました。講座では、町場化した村ならではの近隣住民間の争論、村内の綿作状況、将軍・尾張藩主に献上する鮎鮨の継ぎ立てトラブル等をとおして、在方町でもあり、岐阜街道の宿でもあった一宮村の暮らし等について学びました。初めて古文書を学ぶ方は、慣れないくずし字に悪戦苦闘でしたが、講師や二・三回生の方々とともに、和気あいあいとした雰囲気の中でも古文書の勉強をしていました。

■平成25年度古文書講座の様子

博物館キッズクラブ

▼5月～3月

博物館キッズクラブは、市内の小学校四年生～六年生を主な対象として、歴史・民俗・考古・自然・美術などの多彩な分野を総合的に学ぶ講座です。現在小学生十一人、中学生・高校生十三人が参加しています。今年度は「一宮市名誉市民 市川房枝を知ろう！」「木曽川の源流を体感しよう！」「馬見塚遺跡調査からみた発掘技術の進歩と縄文・弥生時代」「木曽川の生物を知ろう！」の四講座を実施しました。

■木曽川の源流を体感しよう!

■木曽川の生物を知ろう!

美術探訪

一宮のケシと画家たち

大正から昭和初期にかけて、一宮に多くの画人たちが訪れました。彼らと一宮を結びつけたのは、本町で呉服商「美濃勘」を営んでいた野村勘十郎（一八八一～一九六三）。自らも一志と号し、俳句をたしなむ趣味人でした。

一志は、明治四十四年（一九一〇）に京都の本屋で後に京都画壇の革新者となる日本画家・土田麦僊（一八八七～一九三六）の絵に出会います。その絵を気に入った一志は麦僊に手紙を出し、絵を求めました。これがきっかけとなり、以後麦僊が亡くなるまで交流が続きました。その様子は、麦僊が一志に書き送った二百九十通を越える手紙から垣間見ることができます（現在は広島県・海の見える杜美術館蔵）。

一志はパトロンとして財政的に若き画家を支えるだけではなく、写生を重視する麦僊が花や鳥のモデルに悩んでいると、親身に世話をすることもあったようです。なかでも一宮で写生したケシの花を元に描いた二点の絵（新潟県立近代美術館および宮内庁三の丸尚蔵館蔵）は、麦僊の画歴のターニングポイントとなる重要な作品となりました。京都国立近代美術館所蔵の麦僊のスケッチの中には、大日比野の後藤国政宅や浅井町黒岩脇田亀之丞宅のケシを描いたとメモされているものがあります。麦僊以外にも、小野竹喬や福田平八郎など、多くの画家がこのケシを描きに一宮を訪れました。

野村氏宅で「伊豆の海」の前に座す麦僊（大正15年5月21日、野村家提供）

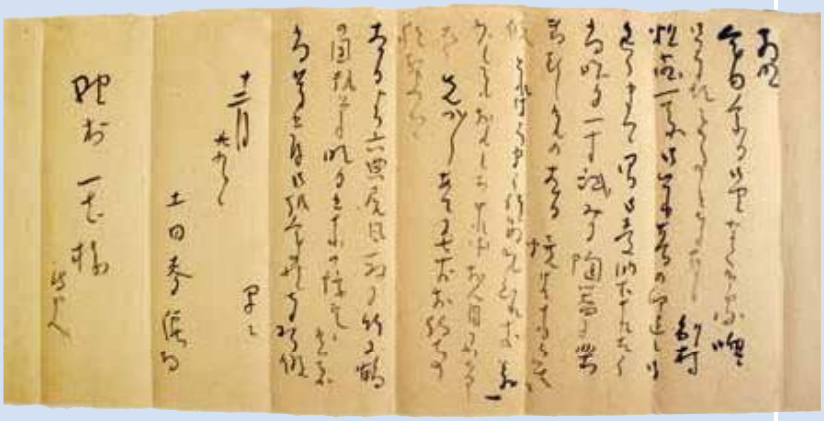
日本画が写生と理想化の間で揺れ動いた時代、一宮の自然が多くの画家の心を捉え、またそれを支える人的交流があったことは、日本美術史に特筆されることといえます。

（成河 端子）

本稿の執筆にあたり、野村宏子氏、田中三郎氏に多大なるご協力を賜りました。記して謝意を表します。

参考文献

①『一宮市浅井町史』一九六七
②田中日佐夫『日本美術の演出者 パトロンの系譜』駸々堂、一九八一
③田中日佐夫『日本画繚乱の季節』美術公論社、一九八三
④田中日佐夫「土田麦僊の野村一志あて書簡」（『成城大学 美学美術史論集』第四輯、一九八四）
⑤東京国立近代美術館編『土田麦僊展』図録、一九九七
⑥田中三郎『いちのみや 歳月変容 人・街・美術・歴史』二〇二三



野村一志宛土田麦僊書簡
大正4年12月29日付（個人蔵）
年末の挨拶と陶器の絵付けや屏風画製作などの近況について書き送っている。

拝啓　年内余日御座なく候所嘸御多忙の御事と奉存候　別封粗画二葉御歳暮の印迄に御送申上候間御受納被下度尚昨日一寸試みに陶器に楽書致し候もの本日焼けて来る筈に候これはうまく行かぬかも知れず万一少しにてもおもしろければおん目にかけたく先づあてにせず御待ちの程願上候
本日より六曲屏風二双に竹に鶴の図執筆明日出来の予定に有之候　尚芽出度御越年の程奉願候　早々
十二月廿九日　土田麦僊拝
野村一志様
侍史

※書きおこしは参考文献④による

文化財保護事業

一宮市埋蔵文化財包蔵地分布調査

埋蔵文化財包蔵地分布調査の概要

一宮市教育委員会では平成二十四年度から平成二十六年度までの三カ年計画で一宮市埋蔵文化財包蔵地分布調査事業を行っています。

平成二十三年度末の市内の遺跡数は市内全体で百二十二遺跡でしたが、平成二十四年度に市東部の調査を終え、東部だけで現存する遺跡百六十四遺跡、滅失した遺跡百十九遺跡の計二百八十三遺跡にのぼることがわかりました。また平成二十五年度には市内の西半域の調査を行ない、さらに遺跡数が増えることが見込まれます。平成二十六年度中には、一宮市のホームページに市内の遺跡分布地図を掲載する予定です。

調査について

平成二十四年度から平成二十五年度にかけて市内の分布調査を行いました。その調査は、埋蔵文化財包蔵地分布調査員が区分された区域内を歩き、特に畑地を中心に、隅の方に土器が落ちていないかをチェックしました。農作業を行う中で、苗木の植栽をする際に土を掘り起こします。土中に石などが混ざっている場合、作物がうまく育たないため、石などを除く際にその石を畑の隅などに集めてあることが多くあります。また細かい土器片が土の上に散布していることもあります。それらをこまめにチェックしながら、農作業をされている人に、「畑から土器が出たことはありますか?」あるいは「地域でそのような話を聞いたことがありますか?」などの聞き取りも同時に行いました。

また遺跡分布図の作成には、現在までの工事の立会調査記録や、博物館に寄贈いただいた資料、郷土史に掲載されている情報も参考にしました。最終的に、土器が採集できる地点や、その種類をまとめ、遺跡として登録しました。

作業をとおして、郷土史に掲載されている「塚」などについては、江戸時代の絵図や古い住宅地図を参考に場所を特定しましたが、興味深いことにそのほとんどが公共施設になっていることがわかりました。塚などは地域の共有地となっていたため、個人所有とならず、町内会あるいは一宮市の所有になったと思われます。

立会調査の記録から

平成二十五年八月、新たに遺跡となった「馬寄集落東遺跡」内で、下水道管埋設工事の事前調査が行われました。炎天下の中、掘削が行われましたが、地表から九十センチ付近の場所で「カツン」と音がしました。機械をとめて確認すると、その付近から完形に近い灰釉陶器や山茶碗が出土しました。そこから東に二十メートル程掘削が進むと、全体を見渡したときに、幅二十メートル程の南北方向の大溝が確認できました。大溝からは土器が何点も出土しましたが、最初に発見した土器のほかは小片ばかりでした。今後この地域でどのようなものが発見されるのか、そして、そこから地域の歴史にどのようにつながるのか、非常に興味深いものです。

出土した土器

土器出土状況

トレンチ断面にみえる大溝

埋蔵文化財について

「埋蔵文化財」の名のとおり、遺跡は地面の中に埋まっており目に見えるものではありません。しかし、わたしたちの祖先がどのような暮らしをしてきたのか、そのルーツを知るための貴重な歴史遺産です。一宮市は、木曽川による土砂の堆積で、他の市町村に比べると遺跡が存在する層にたどりつくまでに深く掘削する必要があります。そのため、これまでに発見された遺跡以外にも、まだ発見されていない遺跡が眠っている可能性があります。そのような遺跡は地中深くに埋まっているため、発見されると非常に良好な状態で残っています。すべての遺跡を保護、保存していくことは困難ですが、調査等によってできるだけ記録保存に努めていきたいと考えています。

（松本 彩）

文化財保護事業

妙興寺釈迦三尊

一宮市では、一宮市文化財保護条例に基づき指定文化財の管理、修理等の保存活用に要する経費の一部を補助する等の保護活動をしています。ここでは、今年度に保存修理された文化財の一つを紹介します。

修理前・三尊全影

釈迦三尊とは

中尊に釈迦如来、その脇侍に普賢菩薩、文殊菩薩を従える形式のことです。しかしながら脇侍は一定の尊像ではなく、梵天と帝釈天（初期ガンダーラ、カニシカ王の舎利容器）、金剛手菩薩と蓮華手菩薩（アジャンター石窟）、薬王菩薩と薬上菩薩（法隆寺・興福寺）、禅宗系寺院では阿難陀と大迦葉（東福寺・建仁寺）を脇侍とする場合もあります。

釈迦如来とは、仏教の開祖すなわちゴータマ・シッダールタを仏として呼ぶ際の敬称です。一般的に「お釈迦様」と呼ばれ親しまれています。脇侍の普賢菩薩は「普く賢い者」を、文殊菩薩は「智慧の者」を意味します。

妙興寺の釈迦三尊坐像

さて本像は、妙興寺の中心、仏殿の須弥壇上に安置されています。仏殿で執り行われる重要な仏事の本尊です。

妙興寺の釈迦三尊では、中尊に釈迦如来を、向かって右に象に乗った普賢菩薩、左に獅子に乗った文殊菩薩を置きます。

釈迦如来坐像は、臍前（へそまえ）に両手を組んで端坐し、禅定印（瞑想にふける坐禅の際に結ぶ印相）を結んでいます。左足を上にして、全跏趺坐の姿です。文殊菩薩坐像は、獅子に乗り、右手で三鈷剣を握り、左手には経巻または梵筴（ぼんきょう）を持っています。普賢菩薩坐像は、象に乗り、右手には「法華経」を持っています。これは「法華経」を誦持する人の前に現れると経典に説かれているからです。

妙興寺創建当初の造仏で、院派仏師の作とみられていましたが、その詳細はよくわかっていませんでした。

享徳二年（四五三）「妙興寺由来記」（妙興寺文書）に「貞和四年戊子に権輿して、貞治四年乙巳に輪奐たり。十有八年を逾へて工訖て之を落す、殿には釈迦、普賢、文殊三尊の像を含をく（…中略…）貞治四年（乙）巳三月十五日を擇て以供養之儀を伸ふ、（…中略…）師は見住として点眼」とあり、この三尊像が本三尊坐像と考えられています。

また安永年間（一七七二～一七八〇）に尾張藩士内藤東甫が著した「張州雑志」第八十二（愛知県郷土資料刊行会・一九七六年・第十巻）には次のように記されています。

本尊安釈迦　坐像長四尺余
本尊之左普賢　坐像長二尺五寸余　大宮形作
本尊之右文殊　坐像長二尺五寸余　作同普賢

釈迦像は長四尺（約百二十センチ）、普賢・文殊両像とも長二尺五寸（約七十五センチ）であったことがわかります。現在の像高は釈迦九二・〇センチ、普賢五八・二、文殊五八・四センチです。従って、「張州雑志」の記述はおそらく光背を含む全高と考えられています。

仏師について

平成十四年（二〇〇二）の愛知県史編さん室による調査で、山岸公基氏（奈良教育大学教授）はファイバースコープを用い、文殊像の頭部前面材内面に南北朝十四世紀中葉に活躍した院派系仏師「院遵」の墨書銘を発見しました。

院遵は、京都等持院、天竜寺の本尊の造像で知られ、院吉の子、院広の弟と推定されています。また今回の修理事業によって普賢像の頭部前面材内面にも「院□」の墨書銘が確認されています。しかしながら、年紀等を確認することはできませんでした。

普賢像 頭部内墨書「院□」

文殊像 頭部墨書「院遵」

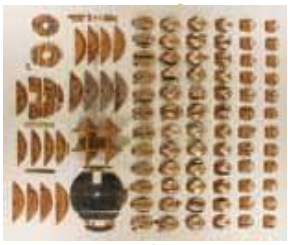
修理記録

本像の修理の歴史は、古くは応永十八年（一四一一）、慶長年間（一五九六～一六一五）、寛文十年（一六七〇）に修理がなされていることが「仏像光背修理案」に記されています。また「仏像光背修理記案」には「其の古記巻て象王の鼻中に蔵めて之在り」と、古記録が普賢菩薩坐像の象の鼻中に納められていたという興味深い記録があります。残念ながら、現在の象の鼻にはそのような記録を納められる部分はありませんが、口元に小さな穴があるそうです。あるいは、象の胴体内部は空洞であり、この部分にその古記録が納められていたのかもしれません。その後大正十二年（一九二四）を最後に、今回まで行われることはありませんでした。

さて、今回の修理記録をみていきましょう。本像の修理事業は、平成二十三年度～平成二十五年度の三ヶ年をかけて、京都市の公益財団法人美術院で行われました。三尊像とも全体的に剥離、脱落が随所に目立っています。個々の像の修理記録は次のとおりです。

釈迦像は、各所で矧ぎ目の緩み、離れ、脱落のおそれがある箇所を解体し、漆及び膠で接合しました。また光背、台座の欠損箇所、割損箇所などは桧材で補修、補足を行いました。

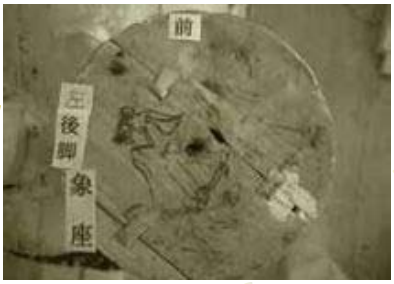
象の内部（撮影 石黒）


釈迦像 解体・蓮弁、蓮肉

釈迦像 解体・本躰頭部取離し

普賢像は、本躰・光背・台座ともに、矧ぎ目の緩む箇所は取り離し、解体を行いました。その後、解体した箇所を漆及び膠で接合しました。また作業をする中で、台座（象）に後世彩色層の下に、より古い彩色層の残存が確認され、上層彩色層を除去し、下層彩色層の剥落止めを行いました。

普賢像 解体・象框受台



普賢像・象左後脚用蓮華座墨画（修理時の落書力）

文殊像も普賢像同様に、本躰・光背・台座ともに、矧ぎ目の緩む箇所は取り離し、解体を行いました。その後、解体した箇所を漆及び膠で接合しました。また作業をする中で、台座（獅子）に後世彩色層の下に、より古い彩色層の残存が確認され、上層彩色層を除去し、下層彩色層の剥落止めを行いました。また普賢菩薩の象座胸部から取り離した鞍下布を、獅子座の正しい位置で、漆で取り付けました。

六百年以上、人々を見守り続けてきた釈迦三尊坐像。様々な人々の願いが込められた像は再び当初の姿を取り戻し、今後も人々を見守り続けていくことでしょう。

（石黒 智教）

文殊像 解体・獅子、框、受台

補修された釈迦如来坐像の台座（撮影 石黒）

補修された象（撮影 石黒）

補修された釈迦如来坐像（撮影 石黒）

参考文献

清水 眞澄「兄弟釈迦三尊像の会話」（『愛知県史のしおり』二〇〇四年）

山岸 公基「《調査報告》妙興寺仏殿本尊釈迦如来及び両脇侍像調査中間報告」（『愛知県史研究』第八号、二〇〇四年）

「釈迦如来および両脇侍坐像」作品解説（『愛知県史 別編 彫刻』二〇一四年）

一宮市史編さん室『新編一宮市史』資料編五、一九六三年

一宮市教育委員会編『一宮の文化財めぐり』増補改訂版、一九九九年

写真提供

公益財団法人美術院

平成26年度催し物のご案内

※詳細は市広報・ホームページ、または博物館までお問い合わせ下さい。

展覧会

- 特別展　妙興寺展　▼10月18日(土)～11月16日(日)
- 企画展　2014一宮市現代作家美術秀選展　▼11月29日(土)～12月14日(日)
- 企画展　暮らしの中の民具　▼1月10日(土)～3月8日(日)
- 企画展　一宮市美術作家協会展　▼3月14日(土)～3月22日(日)
- 企画展　一宮写真協会選抜写真展　▼3月25日(水)～3月31日(火)
- 収蔵品展　玉堂記念木曽川図書館博物館収蔵品展　▼10月10日(金)～11月12日(水)

講座・公演

- 講座　市民文化財めぐり　▼11月初旬予定
- 講座　尾張平野を語る19　▼2月15日(日)・22日(日)、3月1日(日)
- 公演　民俗芸能公演　▼3月8日(日)

通年講座のご案内

古文書講座

平成26年5月～平成27年2月

一宮市博物館では、市内在住・在勤の16歳以上の方を対象に、古文書講座を開講します。博物館で保管している江戸時代の地方文書を中心とした解読とその歴史的背景について学びます。江戸時代の人々が書いた古文書を読んで、その時代の息吹を感じてみませんか。

※詳細は、市広報4月号をご覧ください。

博物館キッズクラブ

平成26年5月～平成27年3月

歴史や民俗、考古、自然、美術などに興味のある子どもたちを対象に、総合的に学ぶことを目的とする活動を行っています。見学会、体験学習など様々な活動を盛り込み、学び、考える力を育てます。

※詳細は、来年度の博物館HP、または学校向け情報紙「こみみ通信」5月号をご覧ください。

〈臨時休館のご案内〉

平成26年3月11日(火)～10月17日(金)まで常設展示リニューアルの為、臨時休館いたします。ご不便をおかけいたしますが、ご理解のほどよろしくお願いいたします。リニューアル開館につきましては、市広報・博物館HPをとおしてお知らせいたします。

なお、文化財行政事務に関しましては、通常通り博物館で行っています。工事中につき、二次災害等の恐れがありますので、ご来館の際は事前に博物館へご連絡ください。なおリニューアル期間中の業務は、平成26年3月11日(火)～10月17日(金)まで、月曜日から金曜日の午前8時30分～午後5時15分までとなります。ご迷惑、ご不便をおかけいたしますが、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

一宮市博物館だより

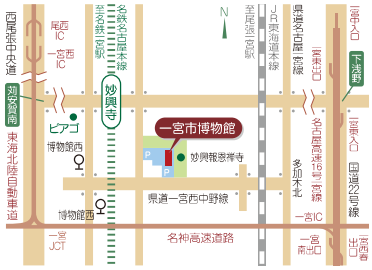
第53号

発行日／平成26年3月31日
編集・発行／一宮市博物館
印刷／三井堂株式会社

利用案内

[休館日] 毎週月曜日、休日の翌日
[開館時間] 午前9時30分～午後5時（入館は4時30分まで）
[観覧料] （常設展・聴講料含む）一般200円（160円）、高校・大学生100円（80円）、小・中学生50円（40円）
※（ ）内は20人以上の団体料金
※一宮市内小・中学生は無料
※市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示された方は無料
※身体障害者等の手帳を持参の方（付添人1人を含む）は無料

〒491-0922　愛知県一宮市大和町妙興寺2390
TEL0586-46-3215　FAX0586-46-3216
URL http://www.icm-jp.com/



[交通] 名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車南口より徒歩7分
ニコニコふれあいバス「博物館西」下車徒歩5分